

放牧場産子と舎飼産子の産肉成績

福島県畜産試験場 沼尻支場
平成15年度畜産試験場成績概要
分類コード 07-02-50394000

部門名 畜産－肉用牛－放牧、畜産栄養、畜産保育・育成
担当者 前田康之・古閑文哉

I 新技術の解説

1 要旨

放牧場産子の肥育特性はまだ未解明な部分が多いが、セリ市場での評価向上のためには、肥育成績が舎飼育成された肥育素牛と同等であることが求められる。試験場内および実証農家において放牧場産子(放牧・良質粗飼料多給育成の素牛)と舎飼産子(放牧育成でないセリ市場導入牛)を同一給与体系(27～28カ月齢出荷の短期肥育体系)で肥育した。素牛の血統はすべて福島県有種雄牛産子とした。その結果、放牧場産子は高い飼料摂取量(図1、表1)および高い発育(図1、図2)を示した。コスト(表2)については、販売価格から導入価格・飼料費を差し引いた差益は±2.5%程度の差で同等となった。産肉成績(表3)も肉量・肉質とも同程度となり、産肉能力の同等性が実証された。

2 期待される効果

- (1) 放牧場産子の肥育特性が明らかとなったことで、素牛の市場評価向上が期待される。
- (2) 黒毛和種繁殖経営における放牧利用促進と、省力化による規模拡大が可能となる。
- (3) 子牛・枝肉販売価格の向上により、繁殖農家・肥育農家の収益性改善が図られる。

3 適用範囲

- (1) 黒毛和種の放牧場産子を素牛として導入する黒毛和種肥育農家
- (2) 放牧を取り入れている黒毛和種繁殖肥育一貫経営農家

4 普及上の留意点

- (1) 肥育素牛は育成時に粗飼料を十分に採食していることが必要である。
- (2) 肥育開始当初は良質乾草を不断給与して腹づくりを行い、徐々にイナワラに切り替える。
- (3) 粗飼料多給育成した放牧場産子は飼料摂取量が高いため、肥育前期に濃厚飼料を摂取しすぎないように制限給与する。

II 具体的データ等

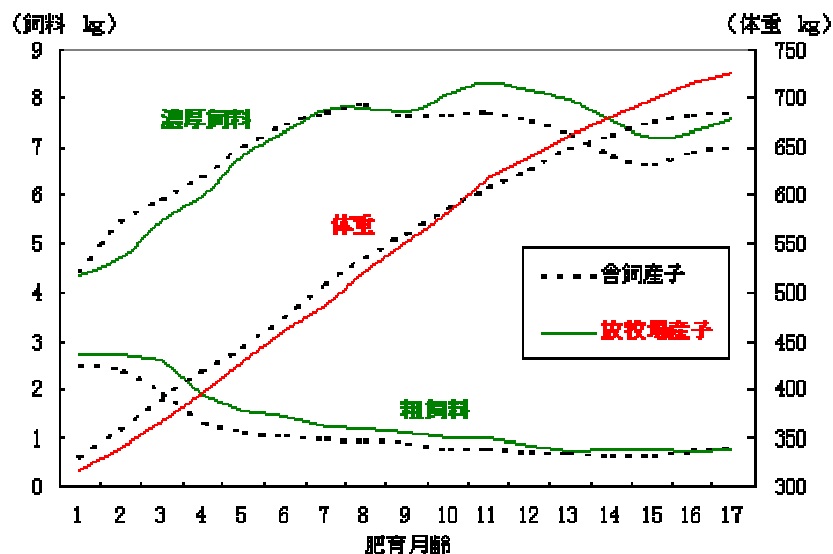


図1 1日1頭当り飼料摂取量(乾物)及び体重推移

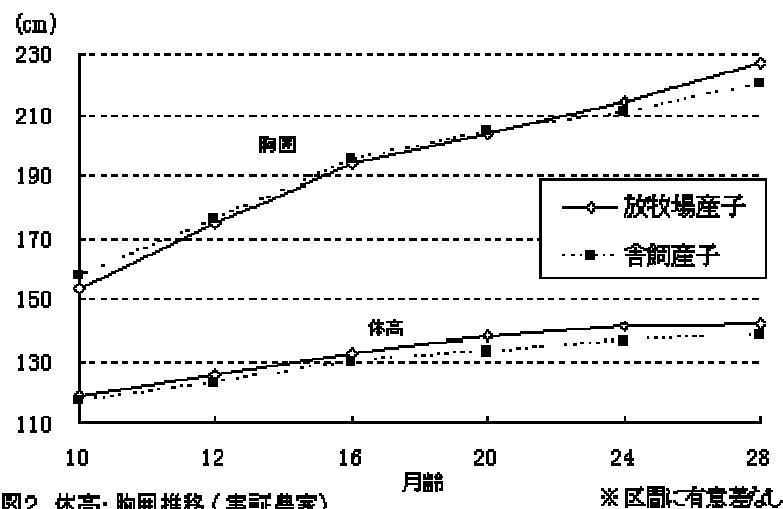


表1 各ステージにおける飼料摂取量 (単位: 乾物 kg/頭)

	肥育ステージ	濃厚	粗飼料	CP	TDN	kg/増体TDN
舎飼産子	前期(181日間)	1,178	288	207	1,121	6.3
	中期(181日間)	1,372	148	214	1,218	8.6
	後期(142日間)	1,057	109	166	940	19.3
	期間合計	3,607	545	587	3,279	8.9
放牧場産子	前期(181日間)	1,176	344	209	1,144	6.7
	中期(181日間)	1,442	181	225	1,288	7.4
	後期(134日間)	1,153	124	179	1,035	14.9
	期間合計	3,771	649	614	3,466	8.3

※ 技術開発試験時の数値

表2 西区の導入・飼料費・販売価格の比較(実証農家) (円/頭、概算)

区	導入価格	飼料費	販売価格	差益
放牧場産子	327,293 ±26,032	175,132	736,280 ±134,134	233,854
舎飼産子	348,076 ±7,757	166,020	754,148 ±348,451	240,053

※ 導入価格、飼料費以外の直接経費は両区で共通

表3 枝肉成績

		枝肉重量	胸囲面積	バラの厚さ	BMS No.	格付け
		kg	cm ²	cm		
舎飼産子 (n=10)	平均	438.5	55.6	7.7	5.4	A2:1 A4:4
	標準偏差	40.1	5.4	0.5	1.2	A2:2 A2:3
放牧場産子 (n=10)	平均	453.4	55.4	8.2	5.1	A2:1 A4:3
	標準偏差	31.9	7.2	0.8	2.4	A2:4 A2:2
全国値 ^(注)	平均	436.0	51.5	7.4	5.3	—
	標準偏差	52.0	7.5	0.9	2.1	
福島県値 ^(注)	平均	454.0	53.0	7.8	5.9	—
	標準偏差	51.0	7.6	0.9	2.1	

注) 舎飼産子、放牧場産子の各区分は福島県有種雄牛で同様の血統構成とした

全国値・福島県値「平成12年度黒毛和種肉質向上緊急対策事業」((社)家畜改良事業団)

舎飼・放牧場産子の平均出荷月齢は27~28カ月齢、全国値は30カ月齢、福島県値は31カ月齢

Ⅲ その他

1 執筆者

前田康之、依田浩文

2 主な参考文献・資料

黒毛和種における放牧育成牛と舎飼育成牛の産肉能力、東北畜産学会第52回大会講演要旨、P31 (2002.8)